



—アメリカ農務省特別白書—
食糧超大国

Will There Be Enough Food?
食糧は十分にあるだろうか

嘉田良平・篠原孝 監訳

家の光協会

アメリカ農務省特別白書

食糧超大国

Will There Be Enough Food?
食糧は十分にあるだろうか



監訳者（五十音順）

嘉田良平

1949年生まれ。京都大学農学部卒。現在京都大学農学部助手。

（Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ.）

篠原 孝

1948年生まれ。京都大学法学部卒。農林水産省に入り、現在内閣総合安全保障関係閣僚会議担当室。（Ⅰ.Ⅱ.Ⅵ.）

食糧超大国

昭和57年7月5日 第1版

監訳者 嘉 田 良 平
篠 原 孝
発行者 来 馬 希 木

発行所 社団法人 家の光協会
〒162 東京都新宿区市谷船河原町11
Tel.(03) 260-3151 振替 東京 5-4724

© 1982 Kada, Shinohara, Kashiwazaki, Katano, Kitano,
Gotou, Konishi, Shimada, Senga, Nakajima, Fujii,
Mizutani, Mori

印刷 共同印刷鶴
製本 寿製本鶴

0036-54316-0301 落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。

食糧超大国＊目次

I プログ

食糧、飢餓、現実的見通し——3——

II 農業の役割

13

アメリカ農業の貢献——15——

豊かな食糧へ——29——

食糧と世界の行方——40——

アメリカ農業と世界の安全保障——56——

III 食糧生産

67

生活水準の鍵——69——

農業王国への道——78——

食糧生産の安定——86——

豊かな食生活を支える畜産——127——

食糧生産の最先端——162——

水と農地の危機——184

生存への道——199

選択の時——211

IV 流通革命 223

サービスの役割——225

鮮度を保つ技術——233

省エネルギー——248

消費者の選択——253

情報システム——262

新たな問題——274

展望——289

V 食糧の国際環境 303

世界の食糧需要にこたえる——305

食糧貿易の役割——309

ベルニ―のジレンマ―― 323

輸出市場の開拓―― 341

食糧援助―― 353

飢餓への挑戦―― 366

グローバルな研究―― 382

国連の役割―― 394

発展途上国との関係―― 404

VI 展 望 415

訳者分担 435

解説 436

監訳者あとがき 440

I ブ ロ ー グ

食糧、飢餓、現実的見通し

食糧はアメリカ人が必要とする以上に存在する。そのこと自体は、喜ぶべきことであり、好ましいことであり、また、満足すべきことであり、おそらく肥満の原因にもなっている。食糧は、少なくとも今日のアメリカ人の記憶では、欠乏したことがない。世界的な不足という心配が、国民に意識され出したのは、ついこの一〇年ほどのことである。

このような変化が、一九七二年七月八日に生じたと考えすることは、完全には現実的でないにしても、意味のあることである。その日に、ソ連指導者はアメリカ穀物をかなり大量に買い付けることに同意した。実際に、ソ連は、三年間に七億五〇〇〇万ドルという同意にもかかわらず、一年間で一一億ドルをも買い付けた。

こうした買い付けは、指導者の政治的決断ばかりではなく、ソ連の不作によりなされたものである。それにもかかわらず、世界各地の不作と重なったため、世界の供給地図が大幅に塗り替えられてしまった。また、これらの一連の動きにより、アメリカにはいつも食糧が大量にあるという安心感も薄らぎはじめたといえよう。

一九七三年には、世界の作柄は正常に戻ったが、減少を続ける在庫が心配され、夏にはアメリ

カのダイズやその関連製品の禁輸につながった。禁輸は、短期間であったが、忘れることのできないことであった。七四年には、さらに驚くべき事態となり、食糧超大国アメリカは、春が異常に遅く訪れたこと、夏の干ばつ、さらには秋の早霜などが重なったことにより秋作物に不足が生じたのである。

減収は、比較上のものであった。たとえば、トウモロコシは、一九七三年の記録的豊作から一七％減、ダイズは、やはり同年の膨大な生産量の二七％減であった。それにもかかわらず、アメリカはこの減収により供給に不安を覚え、とくにトウモロコシについては、ソ連の買い付けに神経質になった。

八〇〇人の報告者

その間、一九七四年十一月、アメリカ提案によるローマの世界食糧会議に一三〇か国が参集した。この会議の成果がどうであれ、一つだけ確かなことがいえる。すなわち、世界中から八〇〇人の参加者が集まり、数多くの非政府間機関がさまざまな見解を述べるなどニュース性にかけては、大成功であったということだ。

CBSは、夕方のテレビニュースで毎日のように報道し、ほかのテレビ局もCBS並みの取り扱いだった。一五日間に、世界の食糧に関しての記事がワシントン・ポスト紙で七回、ニューヨーク・タイムズ紙で一〇回も第一面に掲載された。これらの主要紙やほかの大都市の日刊紙は、

I プロローグ

記者を数多くローマに送り込んでいた。

二年間に及ぶ人間の悲劇はアフリカのサハラ砂漠周辺の大規模な干ばつによりいっそう際立ったが、映像を通して見る人々の関心も時間が経つにつれ、徐々に薄らいでいった。アメリカでも世界でも同様に、飢餓に対する大衆の関心が薄らぎはじめた。

一九七五年の収穫期が近づくにつれ、食糧は、第一面から農業欄にだけ記されるようになり、アメリカ農民は、大豊作が見込まれる作物と下落が予想される価格とをどうするかという昔ながらの問題を抱えるようになった。アメリカ農民は、二年間の飢饉ヒステリーも実際は三年続きで穀物やダイズの価格が下落し、純所得が三〇％下がったにすぎないことを示さなければならなかった。世界の食糧事情は、一人当たりでも一九七二から七四年にかけて、着実に改善されつつあった。アメリカは八〇年に干ばつにより減収をみるまで、五年連続生産記録を更新し続けた。

アメリカ人は、太陽が輝き、セーフウェー「アメリカの巨大スーパーマーケットチェーン」が街角にあるかぎり、食糧はふんだんに、永久にあると考えることに長い間慣らされてきた。しかし、一九七〇年代の出来事は、やはり、そのような人々の間にも不安感を植え付けていた。

振り返ってみると、楽観的な人でも、二五年前と比較すると、一九七〇年代の世界の増産速度は緩慢であり、年々の変動が大きかったことを認めざるをえない。八〇年で終わる九年間に、世界の生産量が四回急減した。加えて、誰もが楽観論者ばかりでもない。世界の食糧というテーマになると、いつの時代についても見解が大きく分かれる。将来における飢餓や栄養不良はどれほ

どのものなのか。それに備えて何をなすべきなのか。そうした変動に対し、アメリカその他の先進国は、どの程度責任を負うべきなのか。

憂鬱と宿命

とかく極論というものは、説明しやすくまた劇的である。悲観論者は、次のように考える。

一、世界の人口は増加し続けるが、際限ない増加傾向にある人口を支えることができないことは明らかである。

二、一九七二年および七四年の減収以来、一人当たりの食糧生産は上昇したというものの、それは先進国の上昇を反映したものにすぎない。発展途上国の一人当たり食糧生産は、ほぼ停滞気味である。

三、食糧消費における改善は、貿易の拡大によるものであり、より貧しい国の自給率の向上によりもたらされたものではない。しかも、貿易の増大はほとんどアメリカによりもたらされた。一〇年間に、アメリカの穀物および油糧種子の輸出量は倍増した。

四、農業資源基盤は脆弱化しつつあり、生産量の拡大により、土壌および水資源に対する負担が増大している。一九五〇年代および六〇年代には生産が行われなかった農地が、今、作付けされるようになり、一方、以前からの農地は年間三〇〇万エーカーの割合で他の用途に転用されている。

I プロローグ

五、第二次大戦後のアメリカの生産量の増大は、新しい研究開発が行われ、技術が大量に採用されたことにある。そして今、われわれは科学的には頂点に達した。たとえば、ハイブリッド・コーンに匹敵する新開発は、今後はほとんどみられないであろう。

このような議論は、飢餓を心配して警告を発する「飢饉」派の間であれこれいわれているのが聞かれる。スペクトルの一方の端は「食糧豊富」派である。飢饉派も豊富派も、歴史にその議論の結論をゆだねなければならない。

飢饉は『創世紀』の第二章にもあるほど古いものであり、アブラハムがエジプトに下つていったときに「かの地には飢饉があつた」という。何百回もの飢饉は歴史にも記されていないことは確かであるが、この一〇〇〇年間に記録された悲劇だけでも、十二分に悲劇的である。

一一二五年には、飢饉によりドイツの人口は半減した。

ハンガリーは一五〇五年に筆舌に尽くしがたい困難な経験をした。イギリスも一五八六年には、ひどい飢饉を記録した。ドイツは、一八一七年に再び飢饉に見舞われ、一八七〇～七二年にかけては、ベルシャで人口の四分の一が餓死した。

一八七七～七八年には、中国で約一〇〇万人が餓死した。インドでは、一七六九～七〇年に飢饉により三〇〇万人の生命が奪われ、一八六五～六六年には一五〇万人、一八七七年には五〇万人の生命が奪われた。一八九一～九二年には、ロシアの飢饉により二七〇〇万人が困苦にあえいだ。

しかし、これらは天候や病気の結果、地域的に生じた食糧生産の減少により引き起こされた食糧飢饉である。飢饉派が現在いつているのは、地球の人口が食糧生産能力以上に増大する結果、世界的規模の飢饉に見舞われる可能性があるということである。これは、マルサスが一七九八年に古典的研究を出版したときに考えていたことである。

明るい見通し

豊富派は、マルサス理論は一度も現実に起きなかったという。飢饉派は、いつかマルサスの正しいことがわかるだろうという。豊富派は、問題が生じても必ず解決されるものであり、マルサスのような必然性はないという。そして、飢饉派に対し、項目ごとに次のように反論する。

一、世界が、数々の理由により人口増を抑制しなければならないことは明らかであり、最貧国は経済成長がままならぬため、いずれ人口は抑制されるだろう。二〇年間に、先進国および計画経済圏諸国において各種の改善が行われたため、人口増加率は年二％から一・八％に下がった。先進国グループの人口増加率は年率〇・八％である。

二、発展途上国においては、食糧生産が改善される大きな可能性が残されており、購買力も改善される可能性がある。

これらの多くの国々では、過去一〇年間に農業生産も食糧消費も改善され、食糧不足に見舞われた年にもかなりの供給を確保するなど、すでに好ましい進歩を示している。こうした

国々にはインド、バングラデシュ、フィリピン、アルゼンチン、ブラジル、コロンビアなどが含まれ、総人口は、ほぼ一〇億人に達する。

三、国際貿易は、他の国の食糧消費の一五%未満にすぎないが、重要性は増大するだろう。こうしたことは、生産の効率化、人間の食生活の多様化、高度化を考慮すると、すべて望ましいことである。

アメリカは、実質的に農産物輸出を拡大する能力もあり、また必要性もあり、そうすることがアメリカ自身の政策目的と認識されている。少なくとも短期的にみた場合には、アメリカは輸出需要に応える能力があるかどうかということよりも、他の輸出国との競争力を心配している。

四、食糧生産に向けられる農地の増加を過小評価する人は、非共産圏諸国の潜在力を過小評価している。

東欧諸国およびソ連は、農地拡大の可能性がほとんどないことは事実である。しかし、先進国や中国を含めた発展途上国は、作付け地を拡大できる可能性がかなりある。

西半球や熱帯アフリカでは、とくにそういえる。たとえば、アメリカも、一九七七年の全国資源調査によると四億一三〇〇万エーカーの作付け地に加え、一億二七〇〇万エーカーが、優良あるいは中程度の農地となる可能性のある土地を有している。

五、農業に適用可能な科学の進歩は、今や頂点に達してしまったという議論は、一九世紀に、

「鯨油が枯渇したときに、世界は暗闇になるだろう」と心配したのに似ている。たしかに、科学的革新のペースは、信じられないほどに加速化しているが、今後もうこうした進歩は、食糧生産に影響をもたらすだろう。おそらく、最も明白なものは、バイオテクノロジー科学の分野にあり、動植物の遺伝子組み替えの可能性である。しかし、微視科学、物性研究、ソリッド・ステート・エレクトロニクスそのほか一連の研究によっても、また食糧に関する諸科学の進歩が約束されている。

ほとんどのアメリカ人は、これらの両極端な見解の中間的考えをもっている。われわれのうちで最も楽観的な人は、世界は多くの制約のなかで、最大の努力をし、最善を尽くすべき重大な食糧問題に直面していることを認識しなければならない。われわれのうちで最も悲観的な人は、これらの力がすでに動いており、人間は問題を解決する動物であり、勝利を収めるのに慣れていることを知るであろう。

貿易の焦点

とくにアメリカでは、来るべき一〇年間に国土・水資源および環境に対する農産物貿易の影響に関心が高まるであろう。

世界も必要としており、アメリカも販売する必要のある食糧の生産力を犠牲にすることなく、将来の生産能力を確保し、資源保護を行うために、連邦自身により、あるいは共同により研究や